

アニメで知る心の世界 4月

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：エースをねらえ！劇場版

あらすじ

テニスの名門校・西高校に通う1年生岡ひろみは、お蝶夫人こと竜崎麗香の華麗なプレーに憧れてテニス部に入部した。ごく普通の女子高校生であった岡は、新任コーチである宗方仁に能力を見出され、手の届くところではないと感じていた試合のレギュラーメンバーに抜擢され、猛特訓の日々が始まった。周囲の嫉妬やお蝶夫人の反感を受け、容赦ない厳しい特訓の中で、何度も挫けそうになる。しかし親友の愛川マキや男子テニス部員の先輩である藤堂の励ましや支え、そして宗方仁の岡を育てるといふ熱い情熱によって岡は精神的にも技術的にも成長していく。テニスというスポーツを通じて、思春期から青年期に至る岡の心の成長をみずみずしく描いたスポーツアニメ作品の金字塔である。

今月のテーマ

1. スポーツアニメ(漫画)と父性
2. ハイキュー！！との相違点

3. スポーツアニメとは

1. スポーツアニメ(漫画)と父性

スポーツアニメ(漫画)の特徴

少しずつ強い相手と対戦しながら、自身が成長し、大人になっていく。

→1960年から1970年代いわゆる高度経済成長期頃から数多く出てくる

「巨人の星」「アタック No.1」etc 鬼コーチによる過酷であまりにも不条理で厳

しいトレーニングを通じて、強い対戦相手と戦い倒していく。(いわゆるスポ根)

主人公達の成長を促し、導く有能なコーチの存在が描かれる：父性の存在

父性：支持しながら、ある方向に導く存在

→エースをねらえ！はスポーツアニメの典型例ともいえる。つまりハイキュー

ー！！と色々な点で相違があるように感じられる。

2. ハイキュー！！との相違点

♪コートではひとりひとりきり 私の愛や私の苦しみも誰もわかってくれない

→ハイキュー！！では、チームとして皆が抱えられる中で、個々が主体的にな

り、イキイキと躍動する形で描かれている。一方でエースをねらえ！は一人の個として強く生きることを強調され、岡ひろみという一人の女性が成熟した大人になるための葛藤と成長が描かれている。

①宗方コーチという明らかな父性の存在

②世代間葛藤（先輩後輩の差）の存在

③過酷な練習の中、何度も挫折し、あまりの辛さに逃げたり、コーチにぶつかったりする。play はあまり描かれない

①宗方コーチという明らかな父性の存在

宗方仁：厳格で、妥協を許さない。成長の為に一貫した態度をとる→父性の象徴
西高校テニス部の練習 当初自分達で立てたスケジュールで練習で消化している。→子供の遊びとしか思えんと吐き捨てる。強い父性で能力を引き伸ばし、厳しい超自我対象) で社会の中で活躍していくように仕向ける。

岡ひろみが代表選手から何度も辞退しようとするが、毅然とした態度で断る。

「決定は変更しない。お前のやるべきことは山ほどある。時間を無駄にしてはならん！！」

→逃げずに、大人になり、(思春期に伴う)情緒的葛藤(つまりエディプス葛藤に)に向き合え！

このテーマが何度も繰り返される。

けいれんを起こして大会を棄権した岡に、精一杯ではないと叱咤し、毎朝 5km 走ることを要求してくる。

全日本ジュニア合宿のとき宗方コーチの岡へのトレーニングのあまりの過酷さに藤堂が疑義を呈する。しかし毅然とした態度で否定する。

宗方コーチ「元々女子にはパワーがない。だから男子以上にトレーニングを積みねばならん」「岡には女を超えてもらう。」

緑川が宗方に岡を選んだ理由を尋ねた時

宗方コーチ「どことなく、その面影が俺の母に似ていた。母は愛する男に捨てられ、その悲しみから逃れられずに一生を終わった。そういう女だった。(中略)俺の記憶には いつもひとり声を殺しては泣いていた母の姿しかない。俺の思い出には母の笑顔がない。(中略) 母のようなか弱い女は、この世の中で一人でたくさんだ。」

→この時代 1970 年代における女性の社会進出の困難さを表しているのかもしれない。それ故に男性と対等に社会でやっていくことは非常に過酷であり、そのことを表現しているようにも感じられる。

→一方で強く成長し、喪の作業の離脱そして再建を目指してほしいという思いでもあるように思える。

Ex 宗方の母：夫の喪失 岡：大人になることで生じる幼年時代の喪失

宗方コーチ「時間がない」と何度も言うが、宗方コーチが不治の病におかされており、余命幾許もないということもあるが、一方でこの思春期青年期の時代は混乱した時期だが、あっという間に終わってしまい、その時間を無駄にしないで欲

しいというメッセージでもあるように感じられる。

宗方コーチの死：父殺しの側面も考えられる。「岡、エースをねらえ！」

しかし岡にとって象徴的な意味での父（つまり同性のライバル、母なのだが）はお蝶夫人である。

②世代間葛藤（先輩後輩の差）の存在 そこを乗り越えていくことが成長につながっている

竜崎麗香（お蝶夫人）：岡ひろみの憧れの存在（大人への憧れの象徴）であり、岡ひろみの理想の対象。しかしそれは羨望の対象の表裏一体である。

cf：ハイキュー！！の影山と及川の関係

1年生は部員106名。岡ひろみはその one of them。当初自分には手の届かない

存在と考えていた。その中、岡ひろみは宗方コーチによってレギュラーに抜擢される。

→憧れの世界で、自分は外から眺めている存在と考えていたが(エディプス葛藤を抑圧した潜伏期の心性)、無理矢理その世界に引き込まれる。:宗方コーチによって、ある種強引にエディプス葛藤がある思春期・青年期の世界に引き込まれる

岡がレギュラーに選ばれたことで、部内の秩序が掻き乱され、そのことを契機に部員の中で岡は僻みやそしりを受ける。そしてそれは岡自身も主体性を確立しつつあるなかで生じる彼女自身の迫害不安を表しているとも考えられる。

→Adolescence Process (青年期に至る過程)に伴う心性に似ている。

(一方で何か憧れの男性を射止めた女性の葛藤、そしてそこに蠢く周囲の嫉妬のようにも感じられる:ここに宗方ファンとアンチファンが生じてくる。)

Adolescence Process:潜伏期に一旦は収まっていたエディプス葛藤が思春期の第二次性徴と共に再び起き、自身のこれまでのアイデンティティが揺らぎ、今までの社会的、家庭的秩序を揺さぶっていく。

潜伏期をひっくり返して、それまで慣れ親しんできた生き方を試される重要な時期。その中で誰もが喪失的感情を抱く

→ある意味、岡は大人の世界に憧れながらもその世界に入ることを拒んできたが、宗方コーチによって半ば強引に引き込まれた。その中で岡は猛特訓に耐え、何度も挫折しながら上達していく。その中で世代間葛藤（とりわけお蝶夫人との葛藤）が強く出て、そこを乗り越えていく。

県のジュニア選抜大会のダブルスでお蝶夫人が岡ひろみとダブルスを組むことを拒絶する。

お蝶夫人「フォア、バックハンド、ボレー、どれひとつとして満足なショットはなくてよ。でも私のパートナーとしてそれは許されない。」「自らの力で伸びるのならともかく、目をかけられたことに恥じるべきです。」（まだ成熟しておらず、乗り越えられないという意味）

しかし岡が独立した個となるには、ぶつかって乗り越えていく必要がある。

選抜チーム選出→お蝶夫人とダブルス→お蝶夫人との対戦

徐々に強くなり、成長し、お蝶夫人を乗り越えていく。まさにエディプス葛藤に
おける父殺し

→Adolescence Process を乗り越え、岡ひろみは大人の世界に入っていく。

③過酷な練習の中、何度も挫折し、あまりの辛さに逃げたり、コーチにぶつかっ
たりする

宗方コーチの今までにない過酷なトレーニングに何度も根を上げ、逃げ出した
い気持ちになり、何度も宗方コーチに電話をかける。

→岡自身暗中模索な中で自分がきちんと成長しているのか確かめたい、宗方コ
ーチが本当に自分をサポートしているのか知りたい思いとも考えられる。

そしてそのやり取りの中で岡の自我が芽生えていく。

i) 宗方コーチの計らいでお蝶夫人とダブルスを組むことになったが、お蝶夫人
のしごきに遭い、それに応えることができず、お蝶夫人に「自らの力で伸びるの

ならともかく、目をかけられたことに恥じるべきです。」と言われ、苦悩し、宗方コーチに電話をかける。

岡 沈黙

宗方コーチ「岡だな」

岡「どうして私ばかりに目をかけられるんですか！教えてください。是非！是非！」

宗方コーチ「答える必要がない。」

岡「では、たった今、テニス部を辞めます。」

宗方コーチ「わかった」

→本当はきちんと岡は説明を受け、自分の存在を確かめたかったと考えられる。

しかし宗方コーチはなぜ答えなかったのか？昭和男児だから？

→岡自身が実はテニスが好きで、自分自身が強くなりたいということに気づいてほしいから その気持ちが芽生えるのを待っていたようにも感じられる。

部活を愛川マキとサボって映画を見に行った時に彼女と部活を辞めることでぶつかり合う。

愛川「お蝶夫人がなによ、人の噂がなによ。やるべきよ、ひろみ ひろみこそテニスを続けるべきよ。」

再び部活を始めることを誓い、宗方コーチのところをお願いします。

宗方コーチ「岡、何日練習を休んだ。」

岡「5日です。」

宗方コーチ「よし、その分、これから練習がきついぞ」

練習中

岡「どうせテニスを続けるなら私、お蝶夫人のようになりたい！」

→大人になる覚悟を持ち、自ら主体性を強く持とうと考える。

この部分が岡が愛川と行った戦争映画(過酷な練習)の INTERMISSION(休憩)と重なる。

ii) お蝶夫人との試合で宗方コーチに勝てと言われ、岡はプレッシャーに押しつぶされそうになり、テニスから逃げ出したくなる。

岡「頑張りました私。特別チームに残りたい。けれどもお蝶夫人に戦いたいとは

思わない。テニスを始めてから嫌な子になっている。なにもかもテニスのことばかり考えて、他の大切なことを忘れてしまいそうで。」

→ある意味自我の芽生えとともに今までの自分が抱いてきた価値観が崩れていく感じがする。内的葛藤や不安が刺激される。まさに Adolescence Process の葛藤 (cf 社交不安障害の好発年齢は 13 歳～15 歳)

そして電話をかける岡

宗方コーチ「岡だな？」

岡「そう言えばいつかのときもそうでした。どうして私だと判るのですか？」

宗方コーチ「俺が考えていることと言え、いつでもお前のことだけだからだ。」

岡「明日の試合、ベストをつくします。一本でもいいからお蝶夫人からエースをとります。」

→「君の名は」で祭りの日の隕石の落下の直前に三葉が、父である町長に直談判するために、町役場に向かう途中で転倒し、瀧の名前を思い出すために手のひらを見て、「好きだ」と書かれていて、その後再び駆け出したシーンに似ている。

→コーチがきちんと自分に関心があり、自分のことを考えている。それが一歩踏み出すきっかけになっている。(ある意味スポーツアニメがラブストーリーになっている。つまりエディプス葛藤を受け入れようという思いでもある。)

3. スポーツアニメとは

スポーツという競技自体がある種、妄想分裂ポジション。

コートを隔てて、味方(良い対象)と敵(悪い対象)に分かれて(スプリット)戦うとも捉えられる。そこに熱狂し、歓喜するのは妄想分裂ポジションの正常面におけるノスタルジア的側面があるように感じられる。

そして試合後に両チームが握手をするというのは良い対象と悪い対象の融合であり、抑うつポジションを意味する。

→スポーツアニメにおいて試合を重ねていくということは妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行を繰り返していくことであり、心身の成長の物語となり、そこでの他者との情緒的な交流が友情や恋愛に繋がっていく。

Adolescence Process に伴い、この年代の若者たちは、色々な喪失的感情を抱き、

妄想分裂ポジションに陥り、周囲の人たちとぶつかり、情緒的に交流し、成長していく。だからこそスポーツアニメと思春期・青年期は非常に相性が良く、この年代がハマりやすいジャンルの一つになっている。

そして人気のスポーツアニメは彼ら彼女らの多くが社会に対して抱く内的世界の象徴になっているようにも感じられる。エースをねらえ！は女性の社会進出の憧れと過酷さ、そしてハイキュー！！は自分の持てる技術を自由に操って社会の中で主体的に関わっていきたいという憧れとその困難さを表しているように感じられる。